

石坂式土器再考

前 迫 亮 一

A Further Consideration on Ishizaka-type Potteries

Maesako Ryoichi

要旨

縄文時代早期前半期の南九州では、貝殻文系の円筒土器文化が盛行する。前平式土器・吉田式土器・石坂式土器に代表されるこの土器群は、昭和20年代に河口貞徳の精力的な調査・研究により型式設定されたものである。ここでは、その中の石坂式土器の範疇について検討し、新古2段階の存在を再確認するとともに、それぞれに石坂Ⅰ式、石坂Ⅱ式という名称を付することを提唱する。

キーワード：石坂式土器、瘤状突起、外反と直行、土器編年の確立

1 はじめに

石坂式土器が型式設定されてから半世紀が経過しようとしている。南九州の縄文土器を代表するものの一つとして、古くから多くの研究者によって取り上げられてきた石坂式土器に関する情報も、大規模開発に伴う発掘調査の増大とともに増加の一途をたどっている。本稿では、まず石坂式土器に関する研究の歩みを詳しく振り返りたい。さらに、新古2段階に分けることの妥当性について検討を行うこととする。

2 石坂式土器研究史

(1) 型式設定 —石坂式土器の誕生—

石坂式土器は、鹿児島県川辺郡知覧町に所在する石坂上遺跡の第四層出土土器を標式とするものである。石坂上遺跡は、古くは塞ノ神式土器の出土遺跡として寺師見園によって紹介された遺跡であるが(寺師 1943)、1953(昭和28)年7月、河口貞徳や河野治雄らによって初めて発掘調査が行われ、「石器時代」1号に掲載された「南九州出土の条痕土器」の中で、その結果が報告された(河口 1995a)。

その冒頭によると、そもそも石坂上遺跡を発掘調査するきっかけとなったのは、河口が京都大学考古学教室において坪井清正に示された「岩川町(現大隅町)狩谷と記された条痕を施した土器」の存在であった。つまり河口は、自身が以前石坂上遺跡で採集した資料の中に、この「条痕を施した土器」が含まれていることを知り、その土器と古くから知られていた塞ノ神式土器との関係を追究する目的で調査に着手したというわけである。

調査結果によると、第三層の褐色砂質土層に塞ノ神式土器、第四層の黒褐色粘土層に条痕土器、両層の境目で山形押捺文土器2片が出土したとある。この第四層出土の条痕土器こそ岩川町狩谷出土の土器と同種の土器であった。河

口はこれを石坂式土器と命名し、その諸特徴を次のように述べている。

「第四層出土の土器は、深鉢型、平底又尖底、縁部は外反し、口縁上面はふくらみをもっている。口縁上面に刻目を印し、頸部に貝殻縁部による斜め、又は羽状の連点文を施し、頸部以下には、貝殻縁部による、綾杉状の条痕を附している」これが初めて世に出た石坂式土器の定義であった。

さて、同論文中にはもう1か所発掘調査の結果が報告されている。それは鹿児島郡吉田村(現吉田町)に所在する大原遺跡のそれである。ここでも石坂式土器が出土しているが、それとは異なるもう一群の円筒土器も出土し、河口はこれを吉田式土器として型式設定を行っている。これら2型式の土器は、第二層(赤褐色土層)と第三層(黒褐色粘土層)の両層から出土するが、出土量と土器片の大小から吉田式土器は第二層に、石坂式土器は第三層にそれぞれの主体があるものと述べている。

以上、石坂上・大原の両遺跡の調査結果をもとに、河口は同論文の結語で考察を行っている。それによると「石坂式土器は尖底及び平底の二形式を有し、押捺文土器にあっては又出水貝塚の例によれば、丸底及び平底の二形式を有して居り、且つ条痕土器を伴出しているのである。これらの事実によっては未だ押捺文と石坂式との前後関係を断定するには資料が不足であるが、両者がかなり近い編年上の位置にあることはまちがいないまい。」と述べ、石坂式土器を縄文時代早期に位置づけた。さらに、平底文化である吉田式土器と塞ノ神式土器は前期に位置づけられ、層序関係から石坂式→吉田式→塞ノ神式という編年案が提示されたのである。石坂式土器に尖底が含まれるという意識が強かったことがうかがえる。

その後、当時國學院大学院生の大脇直泰が「九州における貝殻文土器について」と題する論文を発表し、貝殻を用

いて論文された2系統の土器、つまり“轟系土器と石坂・吉田系土器”について考察を行っている(大脇 1962)。

その中で大脇氏は、それぞれの系統内での変遷・器面調整・胎土・焼成・色調・分布状況等から、「轟系貝殻文土器と石坂・吉田系貝殻文土器を同一文化の所産とするのが困難であることが理解できるであろう」と述べ、2つの貝殻文土器群の系統の相違を示した。また、2系統の前後関係については「どちらが先に発生したかについては、その初頭の型式が確認されていない現在明らかにしがたいが、或る時期において並行して行われた可能性も多分にある」とし、2系統内における一部の同時性を示唆している。

さて、大脇は石坂式土器の器形・文様を次のように説明している。

まず器形については、「この土器の口縁は波状口縁を呈して、頸部は、く字状に屈曲化し、胴部は些かの膨らみもせず底部に達し、底部は平底を呈する深鉢型を基本形態とするものようである。一部には尖底も認められるが、これらの型式に伴うものか、別型式のものか判断としない」と述べている。これは型式設定者である河口の定義を踏襲するものであるが、新たに口縁が波状を呈するという特徴が加えられ、また、尖底が石坂式土器の範疇に含まれるものかどうかについても、慎重な態度を示している。尖底の存在が、石坂式土器の編年上の位置づけに大きな意味を持っていたことを考慮すれば、重要な指摘であるといえよう。

文様については、河口の定義とはほぼ同じであるが、貝殻条痕について「轟系貝殻文土器に認められたところの地文としての要素は薄く、明らかに意匠文としての役割を果たしている」と述べ、石坂式土器の胴部に施される縦杉状の貝殻条痕を文様の一つとして認めている。

以上のように、大脇の考察は、南九州の石坂・吉田系貝殻文土器を轟系貝殻文土器と比較するという初めての試みであったが、これはアカホヤ火山灰前後に存在する貝殻条痕をもつ土器の比較研究に通ずるものでもあった¹⁾。

同様に、石坂式土器を轟式土器との関係から論じたものに江坂輝彌が『考古学ジャーナル』誌上に連載した「入門講座)縄文土器—九州篇 [3]—」がある(江坂 1966)。

江坂は、轟式土器の中でも松本雅明等のいう貝殻条痕を縦杉状に施した轟A式土器(松本・富樫 1961)との比較を行い、「器形、文様から見ると、轟A式土器は石坂式土器に先行する形式のように思われるが、今後西南九州方面の両形式土器を層位的に出土する遺跡の発見を俟って実証したいものである」と述べ、石坂式土器、轟A式土器を早期後半に位置づけた。

江坂の論考と前後するが、『日本の考古学』で九州東南部を担当した賀川光夫は、尖底と平底が混在する石坂式土器をヤトコロ式併行とし、早期末に位置づけている(賀川 1965)。また、石坂式土器の源流については「轟貝塚下層出土の尖底条痕文土器があるいはその根元とも推定されて

いるが、今日まだその問題についてふれることは早計である」と轟式土器との関係については慎重な扱いをしている。

その後、石坂式土器の形式設定者である河口は、「塞ノ神式土器」と題する論文を発表し、南九州の縄文時代早・前期の土器文化をまとめているが、その中で石坂式土器についても、その系統を中心に若干述べている(河口 1972)。

“九州縄文土器早前期編年・文化系統表”と名付けられた表によると、石坂式系統の流れを「石坂→吉田→前平→石坂変形→円筒形条痕文」と編年している。これについて河口は「石坂式系統の文化は吉田式・前平式を経て石坂式から変移したと思われる円筒形平底で口縁下に横位の把手を有する土器が現れる。貝殻條を用いて口辺部には横位、胴部には縦杉状の連点文を施し、口唇部にも同様の施文のある型式である。さらにこれに後続して同じく円筒形を基本形としているが胴部が僅かにふくらみを持ち底部へ細くなった平底土器で、口辺部へ横位の貝殻条痕を施した、胴部は無文の土器が出現する。(中略)貝殻施文具を押し引きすることによって条痕中に刻みを生じたもので、口辺部に施文具2幅の文様が施されている。この施文法は吉田式に見られるもので、吉田式の後続形態であろう。円筒形の系統はこの時期で終息するものと思われる」と説明している。

石坂式土器、吉田式土器は前述の論文で、前平式土器もそれに続く古い段階から知られていたが(河口 1955b)、ここで初めて石坂変形土器と円筒形条痕文なる土器が登場したことになる。特に注目されるのは“石坂式から変移したと思われる”石坂変形土器の存在である。これは鹿児島郡吉田町に所在する小山遺跡から初めて出土した土器であるが、その後、種子島西之表市の下割基遺跡で大量に出土したのをはじめ(西之表市教委 1978)、宮崎県南部から大隅半島を中心に資料の増大している土器である。

(2) 逆転編年案の登場とアカホヤ火山灰

河口を中心として進展してきた貝殻文円筒土器の研究であったが、別府大学考古学研究室の賀川等は『考古学論叢』第4号において九州の円筒土器文化を特集した。その中で弥栄久志が「鹿児島県の円筒土器」と題する論考を発表し、石坂式土器を“円筒貝殻文土器”の一つとして取り上げ検討している(弥栄 1977)。

それによると「口縁部はふくらみを持ち外反する。胴部は円筒状をなし底部は平底となる。底部には尖底をもつものもある。施文としては口縁部に刻目文、口縁外面に貝殻腹縁による羽状、斜状の連続刺突文、胴部は縦杉状の浅い条痕、底部は横走の条痕を施している」と、まずは石坂式土器の基本形を説明し、さらに「石坂式土器は器形的に2つのタイプ、論文上からも2つのタイプが考えられる。前者は口縁部の外反するもの、や、外反するものに分ける。そして外反するものには口縁部肥厚が目立つ。施文上の特徴としては元来縦杉状の地文をもつ条痕タイプと刺突の地文をもつ刺突タイプに分けられる」と述べ、器形・文様の

両方に2つのタイプが存在することを指摘した。

また、口縁部に「2つの耳状貼付け」をもつ土器の存在も提示した。同様に前平式土器、吉田式土器、塞ノ神式土器等の概要を説明し、「円筒貝殻文土器」の時期と編年について考察している。それぞれの特徴から「直行・粗雑型の前平式土器。精製・外反型の吉田式土器、外反・山形・肥厚型の石坂式土器。円筒・くびれの強い外反・そして文様多様化の塞ノ神式土器と続くと思われる。すなわち器形的には直行から外反、肥厚、山形と変化し文様も口縁部から頸部へと変化すると考えられるからである」と述べ、前平式土器→吉田式土器→石坂式土器→塞ノ神式土器という編年を示した。塞ノ神式土器を除いた3型式の編年は、それまでの河口のそれとは全く逆の結果となっている。また、時期については、これらの型式がアカホヤ火山灰下のものであることを指摘し、塞ノ神式土器を前期初頭に、他の3型式を早期に位置づけた。この編年は、型式学的な要素をもとにした組列であり、層位的検討は具体的に示されていない。つまり、当初から河口が提示している石坂式土器と吉田式土器の層位関係については言及されていない。しかし、石坂式土器の編年としては先駆的な研究であり評価されよう。

さて、論文「塞ノ神式土器」で南九州の縄文時代早・前期の土器文化を整理した河口は九州縦貫自動車道建設に伴う石峰遺跡（鹿児島県姶良郡溝辺町）の発掘調査を担当した。その調査報告書の中で、南九州の縄文土器文化についての概要を述べている（河口1980）。

それによると、早期の土器文化を「縄文系・貝殻文系・押型文系」の3つの系統に分け、その中の貝殻文系の一番古い時期に石坂式土器を位置づけ、吉田式土器、前平式土器へと続いていくとしている。これは、これまでの河口の考えと同様であるが、注目されるのは、石坂式土器の前段階に位置する土器を示したことである。それは連点鋸歯文土器と呼ばれるもので、「口縁部に刺突連点文を、胴部には縦位の沈線を施す円筒形の土器である。（中略）早期初頭に位置するものと考えられ、器形等から貝殻文系の土器との繋がりが考えられる」と説明されているものである。

また、石坂式土器についても石峰遺跡出土土器を中心に説明している。これまで河口が示した定義とはほぼ同様であるが、器形の中にこれまで見られなかった直行タイプが存在すること。また、先に弥栄が「2つの耳状貼付け」と説明した土器、「口縁部外壁に2箇の三角状突帯を有するもの」の存在も新たに加えられた。後者については「やや後出のものと考えられる」としている。これは、前述の小山遺跡出土の石坂変形土器との関係を検討する上で注意すべき指摘である。

また、縄文土器の系統との関係について「縄文系統の土器では、貝殻を器面調整具として用いているが、石坂式土器の場合は、施文具として使用している点が異なっており、

系統の異なる土器文化として取り扱う必要がある」と述べ、土器製作者の貝殻の使用に対する基本的姿勢の相違をイコール系統の差として示した。これは先に大庭が縄文貝殻文土器の貝殻条痕が地文として、石坂・吉田系土器のそれが意匠文として施されていることを指摘したことに通ずる見解である。

ところで、石峰遺跡の発掘調査がそうであったように、南九州でも1970年代以降、大規模開発に伴う発掘調査が徐々に増え、縄文時代早期の資料も爆発的に増加した。そのような中で、新東晃一は「南九州の火山灰と土器形式」と題する論文を発表し、南九州における縄文早・前期の土器型式が、鬼界カルデラを噴出起源とする広域火山灰；アカホヤ火山灰の上下で異なることを示した（新東1978）。それは、アカホヤ火山灰の下層で塞ノ神式土器・平橋式土器・押型文土器・前平式土器・吉田式土器・石坂式土器などが、上層で縄文土器・管煙式土器などが出土するというものであった。

さらに、その後発表された「火山灰からみた南九州縄文早・前期土器の様相」では、南九州の縄文早・前期土器の編年試案を示し、アカホヤ火山灰降下を早期と前期の境界とした（新東1980）。それは、南九州で発生、発展していった土器文化がアカホヤ火山灰の降下により消滅し、植生の回復を待って、北西九州の土器文化が到来する。という見解で、アカホヤ火山灰の与えた影響は土器文化をも変化させたというものであった。自然現象を時期区分の境界とすることへの疑義もあるが（河口1985）、土器文化を変化させるほどの自然現象であったという解釈も成り立つであろう。それは、単に土器文化の変化を意味するにとどまらず、人間活動を取り巻く諸様相の変化でもあった。少なくとも、火砕流の到達した範囲においては、壊滅的ダメージを受けたであろうことは想像に難くない¹⁾。

このように新東がアカホヤ火山灰の鍵層としての有効性を指摘したことは、塞ノ神式土器や手向山式土器等の出自を管煙式土器や縄文土器に求めるといったこれまでの考えが明確に否定されたわけで、縄文時代早・前期の土器編年研究にとってはまさに画期的なことであった。つまり、大庭論文以来取りざたされてきた縄文土器と貝殻文円筒土器との関係も、この「アカホヤによる分断」によって、時期・系統の相違が明らかになったわけである。ただ、縄文土器とアカホヤ火山灰層との関係については意見の分かれるところであり、今後検討を要する重要課題である。これについては稿を改めて述べたい。

さて、アカホヤ火山灰を早期と前期の境界とした新東は、早期を前葉・中葉・後葉の3つに区分し、アカホヤ火山灰降下直前までに塞ノ神式土器が南九州に一大文化圏を形成していたとして後葉に位置づけ、その前段階の土器型式群、つまり石坂式土器・吉田式土器・前平式土器といった貝殻文円筒土器を前葉末から中葉に位置づけた。ただし、貝殻

文円筒土器内の前後関係については、層位的に上下関係を把握できる資料が確認されていないとして、この時点ではふれていない。

(3) 石板式系土器の把握と新古2段階の細分

その後、新東は南九州縄文時代早期において大きな問題点となっていた前平式土器と吉田式土器の関係を検討する中で、石板式土器の細分を行っている。まず「南九州の円筒土器と角筒土器」の中で、吉田式土器から石板式土器へ変遷していく過程の土器として倉園B式土器を設定した(新東1988)。さらに「早期九州貝殻文系土器様式」の中で「前平式系土器→吉田式系土器→石板式系土器」という編年を示した(新東1989)。これらはさらに細かく検討されているが、石板式系土器は、「倉園B式土器→石板式土器→下剥峯式土器」となっている。つまりこれは、従来の石板式土器に該当するものの前後に倉園B式土器、下剥峯式土器をそれぞれ設定し、これら3型式をいわば広義の石板式土器として認識しようとするものであった。

ところで、新東によって型式設定された倉園B式土器とは、器形は吉田式土器とほぼ同様であるが、「胴部文様が、斜位の条痕文から綾杉文へと変化」したものである。また下剥峯式土器については、「口縁部が若干広いバケツ状の円筒形を呈し、口縁部や胴部に瘤状の突起を貼付する。また、器面全体に貝殻斜交文で綾杉文を施文する」として、石板式土器からの系譜を想定している。この土器は、かつて河口が石板変形土器と呼んだタイプと同じで、前述のように河口もまた、石板式土器からの変移を想定している。つまり、河口・新東両者ともに石板式土器→下剥峯式土器(石板変形土器)という変遷を提示しているわけである。

しかし、吉田式土器の取り扱いに大きな相違がみられる。新東の場合、吉田式土器は石板式土器の前段階に位置づけているが、両型式の設定者である河口は、当初から石板式土器→吉田式土器の流れを提示してきているのである(河口の場合、石板式土器と石板変形土器の間に吉田式土器が編年されている)。さらに河口は「吉田式と前平式のその後について」の中で、吉田式土器の細分を行い、石板式土器にもっとも近い土器として吉田I式土器を設定した(河口1989)。

前迫亮一は石板式土器に関する2本の論考をほぼ同時に発表し、石板式土器を古段階と新段階の2段階に細分した(前迫1993a,b)。これらの中で前迫は、石板式土器にみられる瘤状突起の出現の要因を探ることで、石板式土器自体の変化の方向性を見いだす検討を行い、新東の編年を追認した。具体的には、瘤状突起の源流が石板式土器の山形口縁にあるとし、「瘤状突起のみられない吉田式系土器→倉園B式土器→いわゆる石板式土器→瘤状突起が出現する段階の石板式土器→瘤状突起が多様化する段階の下剥峯式土器」という流れを示した。つまり、瘤状突起の出現が石板式土器を2段階に細分する契機となつた。

さらに前迫は、新段階の石板式土器には、この瘤状突起出現のほかにも胴部文様の多様化、口縁部直行タイプの出現といった特徴が見られることを示し、この現象を「石板式土器の“動揺・崩壊”」という言葉で表現し、押型文土器文化との接触をその要因とした。

この押型文土器との関係については、同じ頃柴畑光博・上田耕・雨宮瑞生によって「貝殻文円筒形土器と押型文土器との関係」と題する論考が発表され、「石板式土器と下剥峯式土器には、稲荷山式や早水台式を含む横方向施文を基調とする比較的古い段階の押型文が伴う可能性」があることを指摘している(柴畑・上田・雨宮1993)。

近年、早期貝殻文系土器の研究を精力的に進めている黒川忠広は、石板式土器の波状口縁を角筒土器からの系譜の中で捉えた(黒川2000)。また、鹿児島県内の貝殻文系土器を集成し、石板式土器が出土する97の遺跡一覧表を示した(黒川2002)。

以上、およそ半世紀に渡る石板式土器の研究史を振り返った。大きくは型式設定・編年の逆転・新古2段階の細分という流れが見えてくる。それらをふまえながら、次項では石板式土器研究の現状と課題を整理してみたい。

3 石板式土器研究の現状と課題

(1) 編年上の位置づけについて

研究史をみるとわかるように、石板式土器の編年は型式設定時とは異なる展開となっている。つまり、石板式→吉田式→前平式なのかその逆なのかという問題である。

そもそも、石板式→吉田式という編年は、型式設定時の層位的判断から導かれている。型式設定者の河口が、吉田式土器の標式遺跡である大原遺跡の調査結果をふまえて出した結論であった。層位が型式に優先するということについての異論はないが、大原遺跡の場合、基本的に両者は混在して出土しているのである。それぞれの主体が層位的に分かれるという程度では、時間的關係を示していると断定するには慎重にならざるを得ない。前後の土器型式の在り方を考慮すると、やはり吉田式から倉園B式を介し、石板式へ続くという編年案を指示したい。

いずれにしても、時間差を示す明確な出土状況は検出されていないのが現状である。ただ、そのことを意識しながらの調査は常に行っていく必要がある。層位学的方法と型式学的方法によるクロスチェックが求められているのは言うまでもない。

(2) 2段階細分の妥当性について

石板式土器に新古の段階があることは、研究史で示したとおりである。そのことを指摘してから10年の歳月が経過した。この間、この細分の妥当性を指示するものと考えられる調査成果が公表されたので紹介したい。

①大中原遺跡(根占町教委2000)

大中原遺跡は鹿児島県肝属郡根占町に所在する遺跡で、

吉田式土器を中心に縄文時代早期前半の遺構・遺物が多数発見された遺跡である。13に分類された土器のうち、第9類土器としたものが石坂式土器である。この石坂式土器は、ほぼ直線的に外へ開くか直行する口縁部形態をもつもので、いわゆる石坂式土器の特徴である外反口縁は出土していない。つまり、新段階の石坂式土器ということができる。

注目されるのは、10類土器の下割釜式土器と11類土器の無文土器である。これらは9類土器とはほぼ同じ分布域を示すもので、直線的に外へ開く口縁部に、2か所の山形隆起部をもつなど、共通点が多い。9類が貝殻条痕文、10類が貝殻刺突文、11類がナデ仕上げによる無文という胴部文様の違いはあるものの、時間的に近い関係にあることが予想される。

③宮ノ上遺跡（吉田町教委2002）

宮ノ上遺跡は鹿児島県鹿児島郡吉田町に所在する遺跡である。吉田式土器の標式遺跡である大原遺跡は北へ2km離れたところに位置している。8種に分類された土器のうち、最も多く出土したⅡ類土器が石坂式土器である。

このⅡ類土器は、直行する口縁部や、瘤状突起をもつものなど、いわゆる新段階の石坂式土器であった。古段階の石坂式土器は出土していない。胴部文様のバリエーションが豊富なことも特徴である。貝殻条痕を基本としながら、綾杉状のもの・縦位のもの・斜位のものなどがみられる。

注目されるのは、Ⅰ類土器とされている土器でいわゆる円筒形条痕文土器の存在である。完形に復元できたものを含め、数個体出土している。この土器は中九州を中心に出土する土器型式で、中原式（木崎1996）とか一野式（水ノ江1988）と呼ばれているものである。黒川は木崎康弘のいう中原Ⅱ・Ⅳ式土器と石坂式土器が同一遺跡から出土することを指摘し、両者が時間的に近い関係にあることを示唆している（黒川2000）。宮ノ上遺跡の出土状況はまさにそのことを検証する際の貴重な情報を提供してくれた。しかも、石坂式土器も新段階のみしか出土していないことから、かなり限定された情報といえよう。もちろん、両型式が同時に存在した（いわゆる共伴）という確証は得られていない。このことも含め、両者の関係は今後の検討課題である。

以上、新段階の石坂式土器が出土している遺跡の状況を

2例紹介した。このほか、これ以前の調査でも石峰遺跡（鹿児島県教委1980）や榎崎B遺跡（鹿児島県立埋文センター1993）などでも新段階の石坂式土器のみが出土した例がある。明らかに新段階のみで遺跡を形成する例が増加しているのである。一方で、圧倒的に古段階のものが多い加瀬山遺跡（鹿児島県教委1993）や古段階のものしか出土していない岩ノ上遺跡（鹿屋市教委1988）などの例がある。

このように、新古それぞれの段階のみで構成される例が着実に増えていることから、細分の妥当性は指示できるものと考えられる。それぞれの出土域がほぼ同じような傾向を示すことから、両者の違いが地域差ではないことを示しているものといえよう。

（3）石坂Ⅰ式・Ⅱ式土器の提唱

縄文時代の研究において、土器編年作業の果たす役割は大きい。編年作業そのものが考古学の目的ではないことは言うまでもない。しかし、考古学的な作業において、より確かな時間軸を設定する手段として、土器の編年作業が最も有効であると考えている。このような観点に立ち、石坂式土器の新古2段階を簡潔に石坂Ⅰ式・Ⅱ式土器と呼称することを提唱したい。土器の編年作業は、出来る限り明瞭かつ簡潔に進めていく必要がある。石坂式土器の研究においても、Ⅰ式・Ⅱ式と独立した型式として取り扱う段階にきているものとするのである。

時間軸を設定できる独立した一型式としての名称に同じ「石坂式」を使用している点についてふれておきたい。

両者の相違点でもっとも明らかなのが器形である。口縁部が大きく外反するⅠ式に対し、Ⅱ式は外へ直線的に開くか直行するものが多いという違いがある。しかし、文様は同じ貝殻条痕文を使用する例が多い。前述したように、Ⅱ式になると、胴部文様のバリエーションが豊富になるものの、綾杉状の条痕は残っている。器形の違いはみられるものの、文様においては共通項も多いのである。このことから、石坂式という名称は残したまま細分し、共通の気風をもつ土器として意識しておきたい。

この石坂Ⅰ式土器と石坂Ⅱ式土器の特徴をまとめたものが表1である。また、それぞれの型式の代表例を図1、2にそれぞれ取り上げた¹¹⁾。

	器 形					文 様				備 考
	全 形	口唇部	口縁部	胴 部	底 部	口唇部	口縁部	胴 部	底 部	
石坂Ⅰ式	円筒形	やや丸みがある（断面薄鉢状）	外 反	やや膨らむ	平 底	浅い割目（米粒状）	貝殻刺突文が主	綾杉状の貝殻条痕（格子目状のものもあり）	浅い割目（米粒状）	尖底の有無については未だ明確でない
石坂Ⅱ式	円筒形	平坦なものが主	外傾および直行するものが主	ほぼ直線的	平 底	割目のないものが主	貝殻刺突文が主	綾杉状や格子目状の貝殻条痕、全面貝殻刺突文もあり	割目のないものが主	口縁部に瘤状突起をもつものが出現する

第1表 石坂Ⅰ式と石坂Ⅱ式土器の型式概念



第1図 石坂I式土器



第2図 石坂Ⅱ式土器

4 土器編年の確立に向けて

今回は、南九州を代表する円筒土器の一つである石坂式土器の細分を行い、石坂Ⅰ式土器・石坂Ⅱ式土器の設定を行った。内容的には以前細分したものと同一のもので、新しい試みというわけではない。ただし、細分の根拠を裏付ける新しい資料・情報が増えてきていることも事実である。

鹿児島県国分市所在の上野原遺跡に代表される南九州の縄文時代初期の様相は、全国から注目される段階にきている¹⁾。竪穴住居跡や集石遺構などのように、草創期から早期前半にかけての資料は、単に日本の南端の文化として片づけられるような情報ではなくなっているのである。

このような状況の中、南九州の縄文文化研究もさらなる進展が求められている。進展させるためには多くの課題が存在する。発掘調査組織の充実と技術の向上、調査者の資質向上、考古学を取り巻く周辺分野との連携と情報収集等があげられよう。もちろん考古学そのもののステップアップが求められていることは言うまでもない。

このような課題を少しずつでも解決するための手段の一つとして、土器編年の確立がある。どんなに多くのあるいは明瞭な遺構が発見されても、土器編年との絡みがなければより確かな時間軸の設定には至らない。土器以外の遺跡情報を、より確実なものにするためにも土器編年の確立が必要なのである。ただし、編年至上主義に陥らないことを常に念頭に置きながら作業であることを忘れてはならない。

5 おわりに

土器編年の確立という観点から、石坂式土器の細分を再確認した。しかし、このことが最終目的ではないことは前述の通りである。一方では、土器編年が示してくれる時間軸の背景にある人間の活動について、あるいは彼らが生きた社会について、広く深く追究し明らかにしていく作業が求められているのである。本稿がその作業の一環となれば幸いである。

【注】

- 1 アカホヤ前後の柔灰文土器については、近年重留康史がまとめている(重留 2002)。
- 2 大隅半島の中腹にある標高235mの大中原遺跡では、火砕流をはじめとするアカホヤの影響の跡が確認されている(根古町教委 2000)。
- 3 石坂式土器全般の地名表・分布図については黒川忠広がまとめているので参照していただきたい(黒川 2002)。
- 4 上野原遺跡は1999(平成11)年に国史跡に指定され、2002(平成14)年には史跡公園「上野原縄文の森」が開園した。

【引用・参考文献】

江坂輝弥 1966 「入門講座 縄文土器 九州編」[3] 『考古学ジャーナル』3 ニュー・サイエンス社
大脇直幸 1962 「九州における貝紋土器について」 『考古学研究』31 考古学研究会
賀川光夫 1962 「縄文文化の発展と地域性—九州東南部」 『日本の考古学』Ⅱ 河出書房新社
鹿児島県教育委員会 1978 「東原遺跡他」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(10)

鹿児島県教育委員会 1980 「石峰遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
1981 「加葉山遺跡ほか」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
1992 「榑崎A遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(63)
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993 「榑崎B遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(4)
加賀田市教育委員会 1999 「榑ノ原遺跡 第2分母」 加賀田市埋蔵文化財発掘調査報告書(17)
鹿屋市教育委員会 1987 「岩之上遺跡」 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
1988 「打馬平原遺跡」 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
河口貞徳 1955a 「南九州の柔灰文土器」 『石器時代』第1号 石器時代文化研究会
1955b 「先史時代」 『鹿児島のおいたち』 鹿児島市
1972 「榑ノ神式土器」 『鹿児島考古』第6号 鹿児島県考古学会
1980 「まとめ」 『石峰遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(12) 鹿児島県教育委員会
1985 「榑ノ神式土器と轟式土器」 『鹿児島考古』第19号 鹿児島県考古学会
1989 「吉田式と前平式のものについて」 『鹿児島考古』第23号 鹿児島県考古学会
金峰町教育委員会 1995 「河内原遺跡他」 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
柴畑光博・上田耕・岡宮理生 1993 「貝紋文円筒形土器と押型文土器の関係」 『南九州縄文通信』No.7 南九州縄文研究会
木崎康弘 1996 「第V章 総括」 『誕生—上の原遺跡』 熊本県埋蔵文化財発掘調査報告書(158) 熊本県教育委員会
黒川忠広 2000 「南九州貝紋文系土器研究の現状と課題」 『大河』第7号 大河同人
2002 「南九州貝紋文系土器Ⅰ—鹿児島県」 南九州縄文研究会
重留康史 2002 「縄文時代早期末の柔灰文土器(予察)」 『宮崎考古』第18号 宮崎考古学会
志布志町教育委員会 1984 「倉園B遺跡」 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
新東晃一 1978 「南九州の火山灰と土器型式」 『どるめん』JCC版局
1980 「火山灰から見た南九州縄文・前期土器の様相」 『古文化論叢』
1988 「南九州の円筒土器と角筒土器」 『藤木先生古稀記念論集—考古学と関連科学』
1989 「早期九州貝紋文系土器様式」 『縄文土器大観』小学館
寺師見國 1943 「鹿児島県下の縄文式土器分類及び出土遺跡地名表」 鹿児島県埋蔵文化財調査会
西之表市教育委員会 1978 「下河津遺跡」 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
根古町教育委員会 2000 「大中原遺跡」 根古町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
前迫亮一 1993a 「石坂式土器にみる型式変化の方向性について」 『大河』第4号 大河同人
1993b 「倉園B遺跡の再検討」 『南九州縄文通信』No.7 南九州縄文研究会
牧岡町教育委員会 1989 「界子仏遺跡・高天原遺跡」 牧岡町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
松本雅明・富樫卯三郎 1961 「轟式土器の編年—熊本県員塚調査報告」 『考古学雑誌』47-3 日本考古学会
弥栄久志 1977 「鹿児島県の円筒土器」 『考古学論叢』第4号 別府大学考古学研究会
水ノ江和同 1998 「九州における押型文土器の地域性」 『九州の押型文土器—論叢編—』 南九州縄文研究会
吉田町教育委員会 2002 「宮ノ上遺跡」 吉田町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)